

的外

みのる法律事務所便り

第355号

令和元年11月



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL : 0191-23-8960
FAX : 0191-23-8950



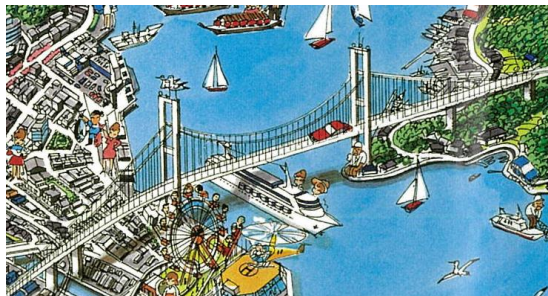
田舎弁護士の駄弁句

57

こんなこと あるから楽し 浮世かな
夢の懸け橋 イラストマップ

令和元年11月10日

青空浮世乃捨



兄は、『夢のイラストマップ』と称して、気仙沼市の未来図を発行してきました。2000年7月1日に第1、2弾を発行してから、第5弾まで発行しました。第2弾から「夢の懸け橋」と称して、『気仙沼湾横断橋』構想を発表しました。

この夢の懸け橋は、夢に止まらずに実現しました。夢のイラストマップに描かれた姿とほとんど変わりのない（仮称）気仙沼湾横断橋が間もなく完成しそうです。

兄の夢は、現実となったのです。『夢の』と言う通り、夢に終わって当たり前とっていたことが現実になったのです。こんなこともたまにはあるから人生は、楽しいのです。

夢が、実現する確率はわずかでしかないかも知れませんが、実現することもあることは、兄の夢の懸け橋が（仮称）気仙沼湾横断橋となって、目の前に出来上がったことで、証明されました。

こんなこともたまにあるから、浮世は楽しいのです。「浮世をば楽しみ尽くせ 病まで」と詠んで、辛い苦しい体験を楽しみ乗り越える術^{すべ}だけに目を向けてきた身としては、夢の懸け橋が夢に止まらず、現実になったことには、いつもと違い、心の底から喜べるという格別な思いがあります。人生には、ときどき本当に嬉しく、楽しくなることもあるのですね。だからこそやれるのです。少しでも可能性があれば、夢が持てるのです。

『兄』シリーズ第6話は、『夢の懸け橋』というタイトルにし、（仮称）気仙沼湾横断橋にまつわる兄の話を語りました。

この事務所便り『的外』をお読み戴いている皆様には、『兄』シリーズ第6話『夢の懸け橋』を謹呈させて戴きます。ご一読下さい。兄が、その付録に『夢のイラストマップ』集を寄せてくれましたので、『兄』シリーズ第6話『夢の懸け橋』と一緒に送りますので、時間のお許しになるときに、広げてみて下さい。

「浮世」とは、「定まるところのない、不安定なこの世」、「はかなくつらいことの多い、この世の中」（角川必携国語辞典）を言うのですが、そんな浮世は捨ててしまおうと、『浮世乃捨^{うきよのすて}』を名乗っていますが、『夢の懸け橋』が（仮称）気仙沼湾横断橋となって、現実のものになったのを目の当たりにし、浮世も捨てたものでもないという思いで、この句を詠みました。

長く生きていれば、よいことにも出会えるものですね。浮世の辛いところだけを捨て、嬉しいこと、楽しいことは捨てないで、喜びを分かち合いたいと思います。

い な べ ん だ べ ん く
田舎弁護士の駄弁句 ⑤8

兄弟で ともに越えた 父の年
奇想天外 笑える親父

令和元年11月10日
青空浮世乃捨

親父おやじは、満72歳で他界しました。長兄は満81歳、私は満77歳となりました。二人共、親父の年を大きく越えました。最近、兄弟で親父の話に及びことがよくあります。

親父は、奇想天外というべき生き方を押し通しました。普通の人なら思いもよらないような風変わりなことを平気でやりました。兄も私も子供の頃は、恥ずかしくて仕方ありませんでした。いい加減な親父だと恨んだり、憎んだりしたこともありました。

ですが、親父の年を越えたら、兄弟で親父の数々の奇行を語る度に笑えてならないのです。あんなおかしな大人は、あまり見たことはありません。よくもあんな真面目なお袋が、あんな親父といっしょになったものだと不思議でなりません。「縁は異なるもの味なもの」です。

兄も私も、親父の年を越え、親父は弟のように見えてきました。悪戯いたづら餓鬼がきのように見えてきました。可愛いとさえ思えてきました。お袋は、女の兄弟のなかった私達兄弟にとっては、目に入れても痛くないほど可愛い妹のように見えてきました。65歳で亡くなりました。もっと長生きしてもらいたかった、もっと、もっといい思いをさせたかったと残念です。

長兄は、「あの親父から学んだ。あの親父の子だったから、ここまでやれた」と言い、「親父は、最高の教育者だ。意識してやったのかどうかは分からないが、親父は、最高の教育を実践した」と言うようになりました。

長兄が「親父を最高の教育者だ」という理由を『兄』シリーズ第7話『後光さす兄』の巻



で語ってみます。近日中に発行できそうです。

親父、お袋の年を大きく越すまで、ともに元気にやれている兄弟で、親を語り合えることは、幸運なことです。その幸運を噛み締めるために、今日は日曜日、これから岩手県一関市から宮城県気仙沼市の長兄の元に、妻と孫に連れて行ってもらいます。「弟、兄の元に行く、楽しからずや」というところでしょうか。

長兄が、親父を「最高の教育者だ」と語るのは、親父が立派な教育を施してくれたとうい意味ではありません。

小学6年の長兄を筆頭に、小学4年の次兄、小学1年の私、4歳と1歳の弟達の5人の男子が、3度の食事に事欠く状況をつくり、小学6年卒業の翌日から口減らしのため、あんこに出され、苦労という体験をさせてくれたことが、長兄にとって、何よりの勉強になったと言うのです。つまり親父は、反面教師だったというわけです。



親父は、奇人・変人とも言えそうな男でしたが、お袋は、真面目で、常識人でした。本をよく読み、学問を好む女性でした。

このお袋からは、長兄も私も、小さなことをコツコツと積み重ねることの大事さを教えてもらいました。怠けずに一生懸命働いたり、勉強したりすることの大事さを教えてもらいました。こんな言葉があるかどうか分かりませんが、お袋は、長兄や私にとって、正面教師でした。

それにしても、年々親父とお袋が懐かしく、恋しくなります。

『兄』シリーズ第6話

－『夢の懸け橋』と『夢のイラストマップ』の謹呈

『兄』シリーズは、第1話『老いの涙』から始まり、第2話『双葉より芳し』、第3話『天に眼』、第4話『小利と大信』、第5話『男泣き』と進み、今回は、第6話『夢の懸け橋』を発行する運びとなりました。

ここまで来られたのは、偏ひとえにこの事務所便りをお読み下さっている皆様のおかげです。「面白かった」、「読み始めたら、途中で止められなくなり、他のことをストップして一気に読み切った」、「自分に重なって、涙して読んだ」などと言う声に背中を押してもらい、第6話までトントン拍子で進みました。

第6話『夢の懸け橋』を謹呈させて戴きます。あまり面白い内容とはなっていません。せめて、兄が「付録」として同封した『夢のイラストマップ』だけでも見て下さい。弟が兄を持ち上げるという内容で、お読み下さる方には、不快の念を与えるのではないかと危惧きぐしています。

私としては、兄の一生懸命な生き方に共鳴するものですから、このようなことまで書いてしまいました。「親馬鹿」という言葉がありますが、「弟馬鹿」と笑って許して下さい。

『兄』シリーズ第7話

－『後光さす兄』の予告

長兄は、学歴は最低ですが、経験則があります。長兄は苦労の中から経験則を身に付け、ここまでやれてきましたが、奇想天外な親父を見て、「これではダメだ」とか「こうしなければならない」ということが一番身に染みて役に立ったと語っています。親父の普通の人は思いつかない、仮に思いついてもやらないであろうという話は、第7話『後光さす兄』で話しますが、ここでは、その一部を紹介します。

趣味・道楽に生きた親父

趣味とは「自分が楽しむためにやっていること」(角川必携国語辞典)だ。道楽とは「金や時間を惜しまずにする楽しみ」(前同)だ。親父は趣味・道楽に生きた人だった。

親父の趣味・道楽は多方面に及んだ。いつでも、いくつかの趣味・道楽に熱中していた。その趣味・道楽の中身は、品格があって気高く、高尚と呼べるようなものは何一つもない。どれも品がなく卑しくて、安っぽく、低俗なものばかりだ。

趣味・道楽の対象が低俗なばかりではなく、その楽しみ方が低俗だった。品のかけらもなかった。品がないどころか、子供から見ても卑しく、醜く、世間様に恥ずかしいと思うことが少なくなかった。

親父は、妻子のことも気にしなかったが、世間のことも気にしていなかった。妻子や世間より趣味・道楽優先だった。趣味・道楽には熱心だった。幼児が遊びに夢中になっているのと同じレベルだ。いつでも趣味・道楽に熱中し、夢中となり妻子も世間も眼中になくなっていた。その集中力は凄い。他で活かせれば、何かができているかもしれない。

二度目の結婚を母としてから間もなく、秋田犬を飼い始め、体が動く間はほとんど合間なく、秋田犬かシェパード犬の大型犬を飼い、世話し続けた。

犬の食事には、子供の食事以上に気を使った。自分の食事も子供の食事も、一度として作ったことがないのに、犬の食事は必ず自分で作り、自分で必ず味見をした。「人間は旨い、旨くないと言えるが、犬は言えない。だから自分が味見をし、確かめてやらなければならない」というのが口癖だった。

妻や子が三度の食事にも事欠く状態であっても、あまり気にしてい



る様子を見せないのに、犬の食事には異常とも思えるほどに気を使い、子供に食べさせなくても犬には食べさせるという、世間一般的な価値基準ではなかった。秤が狂っていると言っても過言ではない。

親父が人間のために料理をしたことは、一度も見たことがないが、犬の食事の準備は、必ず親父が作り、他人には触らせなかった。

母も長兄も、このような親父の生き方には、呆れ返っていた。私も幼少の頃からこのような親父に対しては、どこかおかしいという思いを持っていた。母や長兄が可哀想で、気の毒な気がしていた。

だが親父は「動物はものが言えない。動物を飼ったら、最後まで面倒をみなければならない。それが人間としての責任だ」と悪びれることもない。気おくれしたり、決まり悪そうな態度など少しもない。堂々としているというか、偉そうにしている。「子供だって、妻だって、人間だって、動物だぞ。もっと大事にしてほしい」という思いが湧いた。

親父は気仙沼市に魚の買い出しに行くようになり、その魚を母と長兄が行商するという型が定着し、暮らしが安定しだした頃から、小鳥を飼い始めた。どんどん小鳥が増え出し、家中が小鳥の入った鳥かごで占領された。いつも数十羽の小鳥で人の居場所がなくなる状態となった。

行商の傍ら、家でも魚を売ようになっていたが、その売り場は鳥かごで隅に追いやられる格好となった。その上、親父は家の入り口に「子連れの人はこの家に入るのはお断りです。小鳥が騒ぐので静かにされたい」という貼り紙を貼り出した。親父にとっては、小鳥のためなら商売などどうでもよいということだったのだ。

親父は我が子より小鳥が大事という行動を常に取り続けた。蚊の出る季節になると、「小鳥が蚊に刺されては大変だ」と鳥かごを一部屋に集め、その上に蚊帳をかけた。わが家には、蚊帳は一張しかない。小鳥に蚊帳を取られ、親父もお袋も子供達も、蚊に悩まされる夜となった。

親父は、「人間は蚊など手で潰すこともできる。小鳥は手がないの

で、そんなことはできない。小鳥の方が蚊帳を必要としている」などと言って、悪びれるところがない。お袋も長兄も、親父のこのような生き方に対しては「どうしようもない」という気持ちの切り替えをし、対応していた。

お袋も兄も、家庭内の問題に止まっているうちは、「それは、それとして」という考え方で、親父の趣味・道楽に対応していたが、家庭内に止まらないで世間に迷惑をかけた時は「それは、それとして」では済まず、お袋が迷惑をかけた相手に対し、平謝りに謝り、許してもらうのが常だった。

お袋は親父の趣味・道楽が昂じて、世間に迷惑をかける度にこれをフォローした。親父が他所様の家の廊下を土足で歩いた足跡をお袋が拭いて歩くという格好だ。世間からは、親父は「どうしようもないダメ男」、お袋は「よくできた、良妻賢母」という評判が定着した。当然だ。世間の見方は間違っていない。

親父はよく朝早く起き、近所の畑で野菜の芽を摘んで来ていた。小鳥に食べさせるためだ。

ある時、畑の持ち主が親父に「ヨイツァン（親父与一郎の通称）、野菜の芽を摘むのだけは勘弁して欲しい。大きくなれない。大きくなったらいくらでもあげるから、芽のうちに摘むのだけは勘弁して欲しい」と懇願した。普通なら怒鳴り込むようなことだが、その人は近所に住む優しい方で、親父のことも、お袋のことも、子供達のこともよくよく知っている人だったので、親父のすぐ切れる性格も知っていたので、親父に対し、優しく心から頼み込むように語った。

この優しい被害者の話に対し、親父は「大きくなった野菜はいらない。小鳥は大きくなった野菜より、小さく柔らかい芽が好きだ。小さい芽でなければダメだ」と言い放った。

さらに親父は、「あんたの畑は広い。あんなに野菜の芽が出ている。小鳥が食べるのはほんのわずかだ。少しくらいは芽を摘んだって、野菜は立派に育つ。大勢にはなんら影響もない。大きい気持ちを持って、小鳥の立場も考えてくれ」などと勝手な言い分を捲し立てた。

その被害者は「ヨイツァンにはかなわねえ。とても勝てそうにない。出来るだけ少なめにしておいてください」と言ったり、それ以上は怒る様子も見えず、苦笑いしただけだった。まともな相手ではないとあきらめたのだ。

お袋は、その方にはいつも魚を買ってもらっていたが、時々「とうちゃんが、盗ってくる野菜分」と言って、余分に魚を置いて来たりして、親父がかけている迷惑をお詫びし、許しを願うのが常だった。相手の方は、そのようなお袋の気持ちを汲んでくれて、「タミさん（お袋タミヨの通称）も大変だね」と同情してくれた。

兄はこのような親父から何を学んだというのだろうか。趣味・道楽の前に、やらなければならないことがあるのではないか、という思いは、趣味・道楽に明け暮れ、妻子や世間を疎かにしていたと思える親父の生き方を見て、強烈な印象として残った筈だ。

兄は81歳の今日まで、これと言った趣味・道楽はない。「自分には学がないから、自分の目で確かめたい」という思いで、チャンスがあれば、どこへでも行って見て歩き、日本国内はもう既に隅から隅まで見て歩いていることと、外国にも主要国にはほとんど行って、我が目、我が体で、その国の印象を確かめることが、趣味と言えれば趣味と言える程度である。

兄は、会社経営も軌道きどうに乗り、倅せがれが社長職を継ぎ、会長職となってから、『兄』の第6話で紹介したように、気仙沼市民のことを考え、気仙沼市の未来図などを作っては、世の中に公表するなどの社会貢献することを楽しんでいる。

自分が楽しむためにやっているのだから、これが兄の趣味と言ってもいいのではないかという気がする。世のため、他人のためにもなっているような気がし、まわりの人に迷惑をかけていた親父の道楽よりは、格調が高い。

神棚を燃やす

親父は釜石市では骨董店と称して商売をしていた。釜石製鉄所の

従業員の中には、製鉄所から金属類を掠め取ってくる輩かすがいて、その輩やからから金属類を買い取り、元締めに売るなどの商売で小金を稼ぎ、いくらかの金を持って釜石市から大原町に移り住んだ。

だが終戦直後のインフレで、金の価値は急激に下落した。金を使い果たすのには時間がかからなかった。昭和20年の暮れ頃には我が家の経済状態は三度の食事に事欠く状況となっていた。

昭和20年も今日で終わるといふ大晦日おおみそかの夜のことだった。お袋は食べ物を恵んでもらうために、お袋の実家に帰っていた。残っていた親父と長兄、次兄、私の4人は年越しだといふのに食べるものが何もない状態で夜を迎えていた。

親父は近所で廃品回収業を営んでいる朝鮮出身の人の所に釜を持って走った。いくらかで釜を買ってもらった。その金でコッペパンを何個か買って帰ってきた。そのパンを親父と長兄と次兄と私とで、分け合って、昭和20年終戦の年の最後の夜を越した。

釜は、そもそもご飯を炊く道具だ。その釜を売って、わずかなパンを買い、3人の子供達と分け合って越した大晦日は、親父にはどう思えたのだろうか。明日からは飯も炊けないのだ。

その切なさは察して余りある。「戦争さえなければ」という思いもあったろう。親父がそう思ったかどうかはわからないが、この時の親父の切ない気持ちを思うと、絶対に戦争はしてはならない、させてはならないという思いが湧いて来る。兄も81歳となる今日まで、この夜の父の切ない気持ちを忘れることはなかったろうと思う。

終戦の年が明け、昭和21（1946）年に入った。だが我が家の生活状況は、ますます酷ひどくなるばかりだ。そのような中で、昭和21年2月13日には、弟照也が生まれた。

昭和21年に入っても、親父もお袋も働く場がない。収入は皆無だ。釜石市から持ち帰った金はどうに使い果たした。釜石市から持ち帰った家財道具はほとんど、食べ物に代わった。生きる道は、お袋の実家や、親父の身内や友人、知人つなから、金を借りたり、食べ物を借りて、その日をなんとか食べ繋ぐという方法しかなかった。

呑気者のんきものと思える親父も、さすがに進退いんたいきわまった。親父は昭和21年の暮れ近くになったある夜、神棚を囲炉裏いろりで燃やすという暴挙に及んだ。

親父は、「こんな苦勞をしなければならぬのは、この神が悪いのだ」、「我が家の神は貧乏の神だ。こんな神など居ない方がいい」、「こんな神は燃やしてしまった方がいい」、「その方がいいことが来る」などと喚き散らしながら、神棚を力一杯引引っ張ったり、叩いたり、折り曲げたりして、粉々にして、炉端で燃やした。

粉々にされた神棚は乾燥しているから、パチパチと音を立てて、勢いよく燃えた。私はまだ4歳にもなっていなかったが、神棚が明るく燃え上がった炎は今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。

囲炉裏の周りがパッと明るくなり、親父の顔もお袋の顔も2人の兄の顔も明るく見えて、なんだか明るく晴れやかな気分になった。暗い毎日の中で、この瞬間だけすごく明るかったという印象がいまだに強く残っている。神棚が燃えて発した灯りは、明るい未来を照らし出した気がする。

お袋も、2人の兄も、親父が神棚を燃やすことは止めなかった。思いは同じだったのかも知れない。

親父は神棚を燃やしているうちに、日頃の鬱憤うっぷんが爆発し、自分では止められなくなったのであろう。仏壇から全部の位牌いはいを持ち出してきた。「先祖もさっぱり役に立たない。こんな先祖は供養しても仕方ない」と言いながら位牌を燃やそうとした。

お袋は親父から位牌を奪い取ると、泣いて、「それだけはやめて」と叫んだ。嫁の立場としては、先祖の位牌を燃やすことだけはさせたくなかった。

お袋の必死ぎょうそうの形相ひるに親父は怯んだ。親父はお袋から位牌を取り戻す行動には及ばなかった。あのお袋の気迫は普段見たことのないレベルであり、このことも幼い私の脳裏に深く刻み込まれた。

親父の神棚を燃やすという罰当たりな行動は、我が家の運勢を変えた。それから間もなく、お袋は行商を始めた。親父の神棚を燃やす姿

を目の当たりにして、お袋も本気になった。お袋は親父のこの暴挙とも思える行動を見て、私がやらなければならないと覚悟した。

お袋は商売をした経験などない。読書が好きで、暇さえあれば本を読んでいるという生活を送っていた。人前に出て、物を売り歩くなどということは思いもつかなかった。だが親父の神棚を燃やす姿を見て、「いまはそんな時ではない。どんなことでもやらなければならない」という思いで、色々考えたその結果、行商をやろうと決心した。

お袋が行商を始めて、相当長い月日が経ってのことだが、兄が行商を手伝うようになった。兄は中学3年の1学期が終わると、あんこ先の唐桑町から、大原町の実家に戻った。兄は実家に戻ると、お袋と一緒に行商に歩くようになった。

中学1年の次兄と小学3年の私は家事一切をやった。親父もこのようなお袋や子供達の姿を見て、気仙沼市に朝一番で出向き、魚や乾物などを仕入れる仕事をするようになった。ここに家族総出で魚類を仕入れ、それを売り歩くという仕組みが出来上がった。

神を頼り、神をおが拝んでもごりやく御利益がない。そんな神に怒りをぶつけ、燃やすという親父の行為は、決して褒められたものではない。

だが、神を拝むだけで努力しないよりは、神など頼らず自分が努力する方がいい筈だ。親父は、神棚を燃やただけで、特別努力したとは思えなかったが、まずお袋が動いた。長兄が動いた。次兄が動いた。まだ小学生になっていなかったが、私もそれなりに動いた。その結果、父も動いた。

神を拝むだけで、努力をしないより、神など拝まなくとも自ら努力する方が、少なくともこの世においては御利益がある。

神を拝んでいれば、御利益があると言うのは、神を悪用する輩の言い分に過ぎない。神は頼むものではなく、感謝するものだ。私達、家族にはやれるだけのことをやろうという意識が芽生えた。そして、いつか燃えていった神棚にお詫びとお礼を言おうという気持ちになった。